

雑木林の片隅で、緑の繭の物語③

～ヤママユの意地？～

<羽化直後の姿を観たくて、雑木林をさまよう>

繭にぶら下がった羽化直後のヤママユを観たくて、毎年夏の終わりごろから繭を探し始めます。繭は、鮮やかな緑色で見事に周囲に溶け込んでいて、さらに葉を巻いているものもあるので探すのに苦労します。苦労しながらも一つを見つけると目が慣れるのか次々と見つけることが出来ます。見つけたら目印を付けて羽化の時期まで待つこととします。



<緑の繭たち：2023年夏に見つけたヤママユの繭たち>



羽化した繭

2023年の夏は、繭を8個見つけることが出来ました。しかし、今回も羽化直後の姿を見ることが出来ませんでした。残念！

見つけた8個の繭のうち、羽化を確認できたのはたった一つでした。（右上の繭です）

2024年2月現在、残りの7個の繭は、周りの葉がすっかり落ちているにもかかわらず、いまだに緑のままです。もう羽化することはありません。自然の厳しさを実感する瞬間です。



2023年10月8日、すでに羽化していた

<ヤママユの意地？を見たエピソード>

2019年5月クヌギにヤママユの若齢幼虫を見つけました。羽化を身近で観る「チャンス！」と思い、飼育開始。幼虫は順調に成長し6月に終齢幼虫になり、6月下旬に繭を作りました。



繭は、羽化しないまま年を越しました。繭が今後どのようになるのかを確認するため、観察を続けることにしました。ある時、繭の中からカサカサと音が聞こえてきましたが、何も出てきませんでした。繭が静かになってから数か月後、繭を割ってみました。繭の中から干からびたコンボウアメバチがでてきました。繭を破ることができなかったのです。「やられっぱなしじゃないぞ！」とヤママユの意地を見ました。



<緑の繭たち：ウスタビガの繭>

2023年秋～2024年2月現在、繭を9個見つけることが出来ました。

見つけた9個の繭のうち、羽化を確認できたのは二つでした。（中央と右の繭です）

特に右の繭には、卵がついています。どんな「緑の繭の物語」を見せてくれるのか楽しみです。



<羽化直後のヤママユの仲間たち：クスサン、ウスタビガ、ヒメヤママユ>

羽化直後の成虫に出会った時、思わずガッツポーズをさせていただきます。魅力は、大きさと人間の想像を超えた模様と配色です。学生時代、図画工作/美術の制作に彼らのデザインを拝借していました。

クスサン



ウスタビガ



ヒメヤママユ



<ムシ探しの合間で出会った野鳥たち>

ムシ探しの途中や休憩中に思わぬ野鳥たちとの出会いがあります。目の前で繰り広げられるパフォーマンスにムシ探しを忘れてしまいます。

野鳥たちとの出会いは、ムシが思うように見つけれなくて沈んだ気持ちを元気にしてくれます。



杭から飛び出すルリビタキ



ウソ



ミソサザイ

<食べる>

木の实



イモムシ



ミミズ



<出す>

木の実は、糞と一緒に出すものと思い込んでいました。頭をしきり振るので「どうしたのかな？」と思い注目していました。すると口から丸いものがポロッと落ちました。口から木の实を吐き出したのを見てとても新鮮でした。

糞を出すときに力が入ったのか羽を開きました。↓



ジョウビタキの次はモズ

今年ジョウビタキが我が家の庭にやって来たのは11月の初旬からで、コムラサキの実が目当てでした。紫の実が美しいのに食べられたら残念と思う反面、自分が苗を植えたものではなく、小鳥が種を運んできて自然に生えたものですから、種まきした小鳥が食べるのに文句は言えません。実を食べ尽くすと姿が見えなくなりましたが、年明け後は家庭菜園の周囲で見かけるようになりました。



それが上の写真で、撮影日は2月9日です。（下のモズも同日撮影）

花は寒咲菜花で年末から蕾を収穫して食べていました。頂芽を積むと側芽が伸びるので何度も収穫できます。そのうちに食べ飽きてそのまま放置したので収穫遅れで花になってしまった訳です。

とは言え当地で毎年こうなる保証は無く、強い霜にやられて立ち枯れた年もありました。

菜花の主要な産地は南房総などの無霜地帯だったのが温暖化と共に栽培可能地が北上しているのでしょうか。

ところでジョウビタキは何故この花で羽を休めているのでしょうか。全くの偶然ではありません。

菜花の隣には昨年収穫した落花生の枝葉やモロヘイヤ、オクラなど夏野菜の残渣が積んでありました。

微生物がこれらの残渣を分解して腐葉土化するのを待っているのですが、越冬害虫の棲みかになっている懸念もあります。そこで寒晒しの為に残渣の場所を少し移動してその場を去りました。

この作業を見ていたジョウビタキが菜の花の上で見張り、逃げ出す虫を餌にしようとしている場面です。

多分この辺りへ来るだろうと考えて、事前にカメラをセットしてから作業した読みが当たったと言えます。

予想外だったのはモズも相前後して来たことです。

でも考えてみればモズも昆虫を食べますから不思議ではありません。小さな猛禽といわれるモズは小鳥も襲うので、モズが出没するとジョウビタキは逃げ去ってしまいました。これも自然界の小さなドラマです。



環境学習『木の实つまみ競争』ッテ？

1 木の实つまみ競争



左の写真は、昨年4月に、茂原市桜まつり（茂原公園）に伴って開催された、『茂原市認定市民活動団体フェスタ』に出展した『茂原公園自然愛好会』（筆者代表）ブースの光景の一部『じゅず玉つまみ競争』の様子です。

子どもたち、結構盛り上がっていたので、今年は、色々な木の实バージョンを考えてみることにしました。

名付けて『木の实つまみ競争』。

アオキ、アメリカカワウ、クヌギ、スタジイ（椎の実）、タンキリマメ、ツバキ、フジ、マツ（ぼっくり）、マテバシイ、ヤツデ（表面が少しシワシワ）、以上 10 種類（五十音順）。

選定の根拠は、茂原公園にある種類、一部は身近なところで集められた種類です。

とりあえず A5 サイズの紙、少し隙間をあけて2枚並べて、一方に一定数の実（種）を置いて、30秒で、それぞれの実（種）を、幾つつまんで移動できるか、試してみました。



1 アオキ



2 アメリカカワウ



3 クヌギ



4 スタジイ



5 タンキリマメ



6 ツバキ



7 フジ



8 マツ（ぼっくり）



9 マテバシイ



10 ヤツデ

つまむのに使用したのは、アズマネザサ（直径数ミリ、長さ20cmほど）のお箸。乾燥して少したわんでいます（右写真）。

参考までに、アオキの実（上左写真）は、採集から2週間近く経っていて、表面が少しシワシワになっていてつまみやすく、30秒で22個でした（あくまで個人的試み、能力の結果です）。

さて、そこで問題です!!

それぞれ、30秒で幾つ移動できたと思いますか？お考え下さい。（正解は文末に！）



2 環境学習ッテ？

この遊び『木の实つまみ競争』ッテ、「自然遊び」と考えますか？「環境学習」と考えますか？

その答えはさておき、ある時一緒に考えていた仲間の一人が、「・・・は作品として完成度の高いものがない」という趣旨の発言をしていました。言わんとすることは分からないでもありませんが、このような場面で、完成度が要求されるものや完成度云々との発想そのものに少々違和感を覚えました。

大切なことは、私たちの役割は、知識や技術もさることながら、自然遊びなどの体験を通じて、自らの気づきや学びを促すことです。それが環境学習（環境教育ではない）であって、その理念が共有できていないと感じることが、他の機会でも度々あります。

3 松ぼっくりけん玉



左写真は、同様に昨年4月の光景の一部『松ぼっくりけん玉』の様子です。家族連れで随分盛り上がっていました。嬉しいですね。

今年もやろうと準備を始めて、気づいたことがあります。

右下の写真は、麻ひもを使ってみました。松ぼっくりの重さとのバランスで、ひもの材質によって、けん玉としての機能が違ってくるのです。

ところで、5個6個と用意するのに、最良のひも(材料)でそろえるのはなかなかたいへんです。そこで、ひもの材料、この際違ってても良いことに

しては?と考えました。そうすれば、その辺にある色々なひもで用意できます。

松ぼっくりけん玉で何回できるかを競う、それはきっかけであって、「へえ、ひもによって違うんだ!?’との気づきを促すことが大切なのです(ちょっとおおげさですが)。

そうなんです、ここでも完成度は必要ありません。それは、準備する中での、筆者自身の気づきでした。



4 ネイチャービンゴ

下の写真は、同様に昨年4月、ネイチャービンゴ体験の様子です。なかなか良い写真(光景)と、自画自賛しています。

ところで、一部の仲間から、ビンゴができれば景品をあげたら?との意見がありました。

何か手作りのものを用意して、それを記念にあげる、と言うアイデアもない訳ではないですが、それだけでもお金や手間がかかります。それよりも何よりも、これらのプログラムは、自然から多くのものをいただいている、恩恵を受けている(即ちご褒美)、と言う考え方、気づきが大切なのです。と言いたいところですが、なかなかそのような考え方、みんなて共有できるまでには時間がかかるようです。



なお、今年(令和6年)の『茂原市認定市民活動団体フェスタ』(茂原市桜まつり初日)は、3月30日(土、雨天中止)に、茂原公園(日本桜の名所100選)で開催される予定です。

是非、お立ち寄りください。人手不足の折り、お手伝いも期待しています。

(記:茂原市 望月力智)

【木のつまみ競争の答え】		※あくまで筆者個人の能力の結果です。					
1アオキ(赤い実)	22個	4スダジイ(椎の実)	7個	7フジ	6個	10ヤツデ	10個
2アメリカフウ	17個	5タンキリマメ(種子)	3個	8マツぼっくり	19個		
3クヌギ	5個	6ツバキ	10個	9マテバシイ	19個		

「もしドラ」が見る里山景色

「里山活動にInstagramを活用しよう」という講座の内容が響いて集ったのは8人でした。私達の年代で、まして利用率が高くない素材に取り組むなんて、という逆風にめげず集ってくれました。若い世代が二人入っていたのが奇跡的でしたが、何よりも面白かったのはマーケティングの手法を取り入れていたことでした。

この講座に申し込んだのは、松戸里やま応援団という樹林地を保全する市民活動への勧誘目的でInstagramを始めた。が、フォロワー数が頭打ちになり見てほしい人に届いているのかという疑問が湧いてきたためでした。

受講者を集めるにあたって「Instagramの目的意識やターゲットをどのようにすべきか等の情報発信手法について学ぶ」と内容を分かり易くしました。明確にすることで、関心の高い8名が集まりました。

マーケティング手法から対象のニーズ把握、訴求ポイントを絞っていくことで深堀りできたこと、言語化して対象のニーズやポイントを考える土台について気づくことができたことが成果でした。

Instagram「matsudo_mori 松戸の森ものがたり」の立ち上げを振り返ってみると、活動する仲間を増やしたいということであれば SNS を活用してみようではないか。というのがそのきっかけでした。里山活動している私達にとってInstagramは如何ほどの価値があるのか、少し立ち止まって考えるということもあってよいのかと思いました。

講座の内容に触れると、Instagramの認知率は60代男女とも認知率は8割近く、70代になると男女ともに約7割という現状。利用率はというと60代男女では2割以下、70代男性は1割、女性は8%。投稿率となると5%から2%となってしまいます。これが現実でした。

さて、マーケティングといえば、ドラッカーのマネジメントの登場です。ドラッカーと言えば、かつて「高校野球のマネージャーがもしドラッカーのマネジメントを読んだら」…いわゆる「もしドラ」という小説でアニメ・映画になり、一世風靡した、あの「もしドラ」です。

「もしドラ」をつまみ読みすると①顧客とはだれか、顧客が求めていることは何かを考えること、②成果を上げるためには個人の強みを生かすことが重要…。と浮かびあってきました。

里山活動、自然観察会の活動にも参考になる事柄だらけでした。

市民活動におけるマーケティングの理想は活動への勧誘を不要にする。

市民活動におけるマーケティングが目指すのは参加者を理解し参加者に活動内容を合わせ、自ずと参加者が増えるようにすること、そのための方法として「ペルソナ」を作ることの重要性が指摘されています。

誰のための事業なのか。誰をターゲットとする事業なのか。ペルソナを設定する作業を通じて、自分たちの活動は誰が喜ぶのかを考えること。これが味噌です。PRするときも「自然の中で体を動かせることに価値を感じる人」もいれば、「草木に触れること」に価値を感じる人もいます。どちらに向けてPRするかによって発信する情報に変化することに気づき始めたところでした。

講座はターゲットとペルソナを明確化させたところで終了でした。その次に何をするのか。私たちに課題が残されました。(松戸市 藤田 隆)



シュンラン（松戸市）